

# 考古学による 日朝関係史から見た「磐井の乱」 中・北部九州地域における対朝鮮半島交渉の様態

“Iwai Rebellion” as Seen from the History of Japan-Korea Relationships  
by Archeology : Form of Negotiations with the Korean Peninsula  
in the Central and Northern Kyushu Region

高田貫太

TAKATA Kanta

①はじめに

②5世紀前半の動向

③5世紀後半の動向

④6世紀前半の動向

⑤中・北部九州地域の対朝鮮半島交渉と「磐井の乱」

⑥まとめ

## 【論文要旨】

「磐井の乱」は、527年（530年とする説もある）に勃発した倭王権（継体大王）と北部九州（筑紫君磐井）との抗争である。長年の研究によって、当時の東アジア情勢、特に日朝関係の動向が「乱」の勃発に深く関係していることが明らかにされている。したがって、5、6世紀における中・北部九州地域の対朝鮮半島交渉の様態を考古学的に検討し、その内容と古代史の研究成果を総合化することによって、より豊かに「磐井の乱」の歴史的意義にせまることが可能と考える。

考古学的な検討の結果、主に5世紀代には、中・北部九州地域の対朝鮮半島交渉には、大きく2つの様態を想定できた。すなわち、倭王権主導の外交に積極的に参与しつつその意図のもとで活動するような様態と、対外活動に長けた人物を傘下に置き、独自の対朝鮮半島交渉を重ねる様態である。

また、5世紀後半には、玄界灘沿岸地域と有明海・八代海沿岸地域では、倭王権との関係に微妙な差異が認められた。後者は、倭王権とより直接的な関係を結びつつ、他の諸地域社会と「野合」するような形で交渉を行っていたようである。相対的に百済や大加耶とのつながりが深い。その一方で、前者は主体的な交渉の比重が高く、新羅とのつながりがより緊密である状況が明らかとなった。

そして、6世紀前半には、大加耶系の垂飾付耳飾が玄界灘沿岸地域に突如として広まるなど、交渉の様態に変化が認められた。その背景に、中・北部九州地域の首長層が、主に倭王権の意図に沿うような形で対朝鮮半島交渉活動を行う動きを読みとった。

以上のような考古学的な検討と、古代史によって明らかにされた「磐井の乱」の動向や背景を総合化すると、かなりの整合性を見出しえる。したがって、「乱」勃発の要因のひとつには、主体的な対朝鮮半島交渉をくりひろげる中・北部九州地域と対外交渉権の一元化を志向する倭王権の確執があったことが想定できる。

【キーワード】「磐井の乱」、中・北部九州地域、埋葬施設と副葬品、古墳時代、日朝関係

## ①……………はじめに

「磐井の乱」は、527年（530年とする説もある）に勃発した倭王権（継体大王）と北部九州（筑紫君磐井）との抗争である。『日本書紀』は多くの紙幅を費やして、その経過を叙述している。また『古事記』や『筑後国風土記』逸文にも記録があり、これらが編纂された8世紀においても、人びとに重大な事件として認識されていたと考えられる。

その経過や歴史的な意義については、膨大な研究史があるけれども、それを最大公約数的にまとめると、おおむね1960年代くらいまでには、次のように考えられていた。<sup>(1)</sup>

北部九州は任那支配のための前線の兵站基地として、大和朝廷から多大な負担を強いられていた。その負担に耐えかねた各地の首長や民衆は、北部九州の大首長で大和朝廷の地方行政官（国造）でもあった磐井へと結集して大和朝廷に反旗をひるがえした。

まさに、大和朝廷に対する地方行政官の「反乱」という見方である。しかし、1970年代以降に、朝鮮半島における「任那支配」論の架空性が論証される〔山尾1989、田中俊1992など〕中で、<sup>(2)</sup>「磐井の乱」の評価も大きく変わった。現在では、おおよそ次のようにまとめることができる。

北部九州の大首長だった磐井は、独自に朝鮮半島との交渉をおこないながら、倭王権の外交政策も支えていた。しかし新羅の加耶侵攻を契機として、倭王権は北部九州の対外交渉権を掌握しようとする。そこで磐井は新羅と手をむすぶ一方で、倭王権を見限って抗争に至った。

これを単に地方行政官の「反乱」とみることはできない。むしろ、対外交渉権をめぐる倭王権と北部九州の「戦争」という評価がしっくりくる〔山尾1999、吉田2005など〕。また、当時の東アジア情勢、特に日朝関係の動向が「乱」の勃発に深く関係していることが、明らかにされた。

このような把握の仕方については、筆者も基本的には妥当と考える。ただ、これまでの研究は、ある意味で当然のことだが、史料に基づく古代史の枠組みの中で進められてきた。考古学的手法に基づく古墳時代の日朝関係史研究が盛況な現在において、特に中・北部九州地域の多元的な対朝鮮半島交渉の動向の中で、「磐井の乱」の意義を検討することも重要と考える。

そのような意味あいにおいて、本稿では考古学的手法を通じて、中・北部九州地域の対朝鮮半島交渉の動向や様態を概括的に論じ、その中で「磐井の乱」を歴史的に位置づける予察を試みたい。具体的には次の3点について検討する。

- (1) 5世紀から6世紀前半における日朝関係史の動向を中・北部九州地域に焦点を定めて、考古学的に整理する。その際に、中・北部九州地域における朝鮮半島系の古墳資料（副葬品や埋葬施設）を中心に検討する。
- (2) (1)の整理に基づいて中・北部九州地域の対朝鮮半島交渉の様態を整理する。
- (3) <sup>(3)</sup>主体的な交渉を重ねる中・北部九州地域と対外交渉権の一元化を志向する倭王権の葛藤

の中に、「筑紫君磐井の乱」の要因のひとつをみいだし、それがどのように考古資料に反映されているのか、について予察する。<sup>(4)</sup>

地理的な検討対象は、朝鮮半島中南部と中・北部九州地域（玄界灘沿岸地域と有明海・八代海沿岸地域）とする。<sup>(5)</sup> また、対象時期については、おおむね5世紀前半（陶邑編年のTK 73～TK 216型式期）、5世紀後半（TK 208～TK 47型式期）、6世紀前半（MT 15～TK 10型式）という程度に、日朝両地域の墳墓資料（主に副葬品や埋葬施設）を、ある程度無理なく当てはめることができる範囲で区分したい。そして、朝鮮半島系資料の系譜論については高田 2014a における成果に基づく。

## ②……………5 世紀前半の動向

### 1. 倭王権の外交に参与する様態 ——月岡古墳(図1)

5世紀前半における北部九州地域の対朝鮮半島交渉を示す考古資料として、特に注目できる古墳は、福岡県うきは市月岡古墳（墳丘長約80mの前方後円墳）である〔吉井町教育委員会 2005〕。長持形石棺を納めた竪穴式石室を埋葬施設としており、石棺内部や石室壁体と石棺の間の床面から、龍文透彫・草葉文透彫帯金具、胡籥、長柄輪鍔、籠手（肱甲）など、様々な朝鮮半島系の副葬品が出土した。

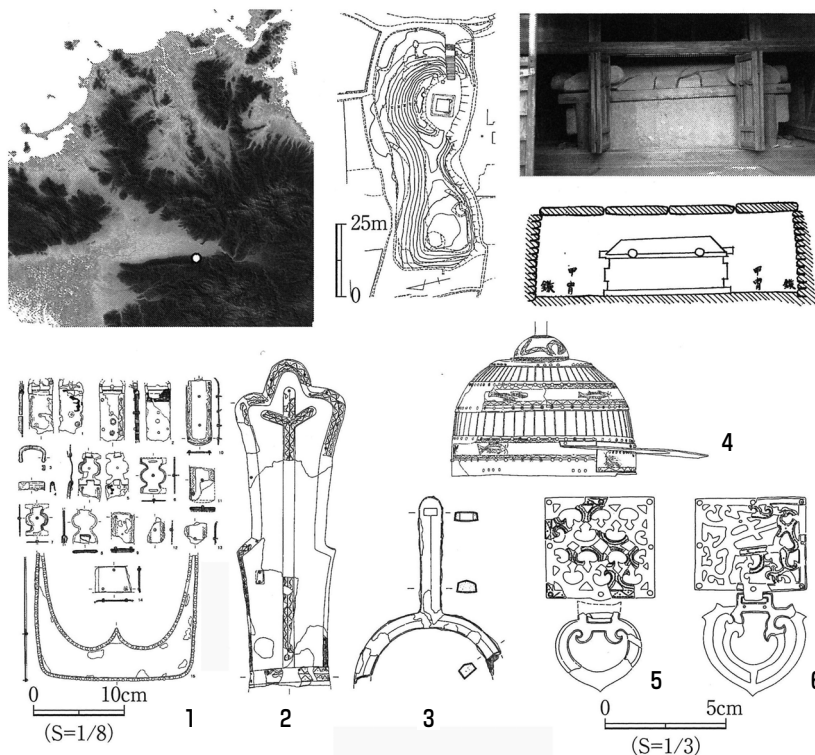


図1 福岡県月岡古墳

1: 山形金具付胡籥 2: 籠手（肱甲） 3: 長柄輪鍔 4: 金銅装眉庇付冑 5: 草葉文透彫帯金具 6: 龍文透彫帯金具

**多様な朝鮮半島系副葬品** まず、龍文透彫帯金具（図 1-6）については、三燕—高句麗—新羅—倭という系譜を追うことができ、倭の出土資料は、新羅圏の資料と同じような型式系列の設定が可能である〔高田 2013・2014a〕。現状では新羅系と把握することが妥当であろう。これは、草葉文透彫帯金具も同様である（図 1-5）。

また、山形金具付胡籬（図 1-1）については、東萊福泉洞 21・22 号墳出土資料との類似性や、土屋隆史による吊手金具の分析〔土屋 2018〕に基づけば、新羅系と判断できる。さらに、籠手（肱甲）についても、類例は洛東江以東地域を中心に分布している（図 1-2）。

一方で、長柄輪鍔（図 1-3）は、柄部上端から輪部上半にかけて Y 字形の鉄板を被せており、柄部と輪部の断面が基本的に五角形を呈している〔諫早 2012〕。このような特徴の輪鍔は、百済、大加耶の圏域に分布しており、百済・大加耶系と想定できる。

以上のように、月岡古墳の朝鮮半島系の副葬品は、新羅系と百済・大加耶系に大別することが可能であり、被葬者や造営集団が多角的な交渉を重ねていたことがうかがえる。

**古墳の地勢と周辺の集落遺跡** 月岡古墳は、筑後平野の東端、浮羽地域に位置する。有明海から筑後川を遡上し、浮羽—日田—豊前（周防灘）・豊後（別府湾）という東西を結ぶ交通路と、博多湾—朝倉—浮羽へ至る交通路の結節点に位置する〔橋本 2010, 杉井 2010〕。古墳の周辺には、早くにカマドを導入した集落（塚堂遺跡や仁右衛門畑遺跡）が展開する。これらの集落遺跡では、朝鮮半島系土器や U 字形鋤先、青銅製三累環頭などが出土しており、単発的ではない朝鮮半島中南部との頻繁な交流の中で、当地に定着を図る朝鮮半島系の集団の存在を想定できる。

**畿内地域とのつながり** 月岡古墳の被葬者や造営集団の対朝鮮半島交渉の様態を検討する手がかりは、大きく 2 つある。ひとつは、埋葬施設の長持形石棺である。古くから指摘があるように、畿内地域の最高首長層を中心に用いられたものを忠実に模倣しており、かつそれを竪穴式石室に納める事例は、現状では北部九州地域において他に例をみない。また、金銅装眉庇付冑（図 1-4）の副葬

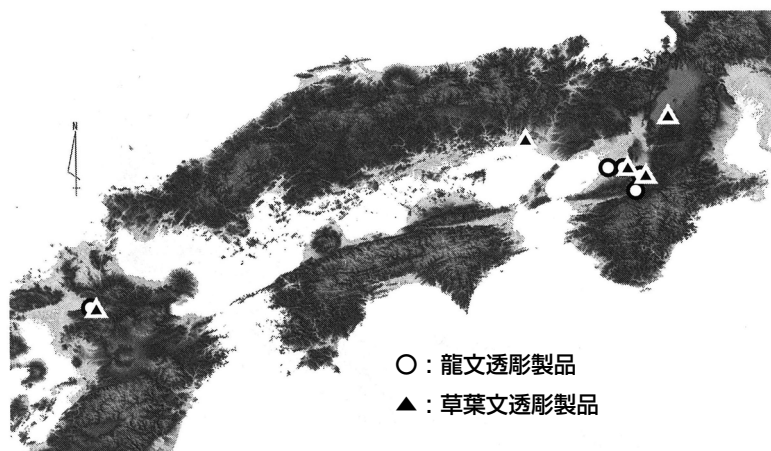


図 2 龍文・草葉文透彫製品の分布  
○：龍文透彫製品 ▲：草葉文透彫製品

や窖窯導入期の埴輪の採用〔高橋 2003〕などにも、畿内的な色彩が色濃く認められている。

2つめは、龍文・草葉文透彫製品（帯金具や馬具など）の分布が、畿内地域とその周辺を中心に分布しており（図2）、5世紀前半代の倭王権と新羅の政治経済的な交渉を反映している可能性が高い点である。

以上の諸点を考慮すれば、対朝鮮半島交渉の多様な経路を有していた浮羽地域の有力首長層が、倭王権（もしくはそれを構成する中央豪族層）と結びつき、その政治経済的な関係を基盤として、王権の外交活動に参加するという交渉の様態を想定できそうである。

## 2. 地域社会の主体的な交渉様態 ——堤蓮町古墳群（図3）

一方で、地域社会のより主体的な交渉活動を想定できる古墳資料も確認できる。それが、浮羽地域の近隣の朝倉地域に位置する福岡県朝倉市堤蓮町古墳群である〔甘木市教育委員会 1999〕。まず、1号墳は直径18～20mほどの円墳であり、埋葬施設は竪穴系横口式石室の可能性が高いと考えられている。激しい盗掘を受けていたが、垂飾付耳飾と青銅製三累環頭が出土した。2号墳も埋葬施設の詳細は不明とせざるを得ないが、初期須恵器を副葬していたことが確認されている。

**1号墳の副葬品の系譜** 1号墳から出土した垂飾付耳飾（図3-1）は、主環が金銅製、他の部品は金製である。主環＋遊環＋空球中間飾＋細身で小ぶりの心葉形垂下飾という意匠を呈する。このような意匠の資料は、5世紀前半～中葉にかけての朝鮮半島中西部に分布しており、漢城期百済に系譜を求めることが可能である〔高田 2014a〕。

また、青銅製の三累環頭（大刀）の特徴は、小ぶりで三累環の断面がクサビ形を呈する点にある（図3-2）。このような特徴を有する資料は5世紀前半の洛東江以東の各地（大邱，蔚山，釜山）か

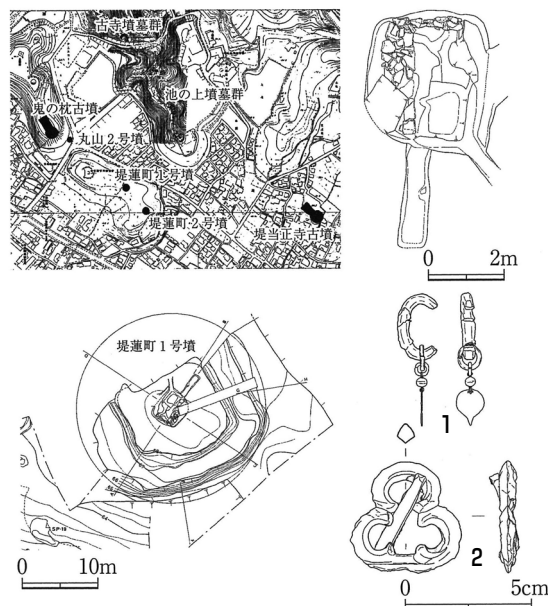


図3 福岡県堤蓮町1号墳

1：百済系の垂飾付耳飾 2：青銅製三累環頭

ら出土し、特に東萊福泉洞古墳群（10・11号墳、(東)8号墳）から複数出土している。したがって、新羅系と判断でき、おそらくは釜山地域とのつながりの中で入手した可能性が高い。また、2号墳において確認できる須恵器の主体部副葬も、朝鮮半島系の新来の葬送儀礼である。

**周辺の遺跡** 堤蓮町古墳群の近隣には、同時期の朝倉地域の首長墳で、金銅製胡籥や砥石などが出土した堤当正寺古墳（墳丘長約70mの前方後円墳）が位置する〔甘木市教育委員会 2000〕。また、地域性の強い初期須恵器を生産した朝倉古窯址群、その操業に関わった渡来人集団の墓域と想定される池の上・古寺墳墓群もほど近い。他にも朝鮮半島系の遺構・遺物は数多く、確認されている。

**調査報告者の見解** 堤蓮町1号墳の被葬者の性格については、発掘調査を担当した吉武孝礼が、「畿内政権の官僚像だけでは説明できないもの」として、次のように指摘している。

「堤蓮町の墓域を形成した者は、池の上・古寺の被葬者集団を率いてきた指導者的な立場で、独自の地位・存在・権威であったこと、これには半島とのコネクションが保たれていたこと、鬼の枕（同じ丘陵に六世紀中ごろにきずかれた前方後円墳：筆者註）の段階で在地化し、地域の首長的立場に発展したこと、を考えることができる」〔吉武 1999 72頁〕。

吉武のこのような見解は十分に首肯できる。加えて、堤蓮町1号墳の副葬品の系譜からみると、その「半島とのコネクション」は多元的であり、埋葬施設には畿内的な要素は確認できない、なども指摘できる。

**渡来人集団をとりまく階層性** さらに、朝倉地域において、堤当正寺（有力首長層）―堤蓮町（渡来人集団の統率者的立場）―池の上・古寺（渡来人集団）という階層性を想定できることを積極的に評価すれば、当地における多様な朝鮮半島系文化の受容や渡来人集団の活動のすべてを、倭王権主導の外交と結びつけることは難しい。それよりも、堤蓮町1号墳のような朝鮮半島系色彩の濃い中小古墳の被葬者が、堤当正寺古墳（や月岡古墳）の被葬者のような北部九州地域の有力首長層の主体的な対外活動を、実質的に担っていたと想定するのが自然であろう。

### 3. 北部九州地域の2つの交渉様態

以上のように、北部九州地域における有力首長層の対朝鮮半島交渉には、

- (1) 倭王権主導の外交に積極的に参与しつつ、その意図のもとで活動するような様態。
- (2) 堤蓮町1号墳の被葬者のような対外活動に長けた人物を傘下に置き、独自の対朝鮮半島交渉も積極的に行う様態。

という2つが、大枠として存在したと判断できる。

このような交渉様態の多様性が、朝鮮半島系副葬品の分布に反映されている可能性がある。上述のように、月岡古墳で出土した新羅系の龍文・草葉文透彫製品は、畿内地域とその周辺を中心に分布するのに対して、長柄輪鍔は九州地域にまとまって出土しており、畿内地域には新羅・金官加耶系の短柄輪鍔が主に分布している（図4）。前者が(1)のような交渉様態、後者が(2)のような交渉様態を反映している可能性は、考慮されてよい。

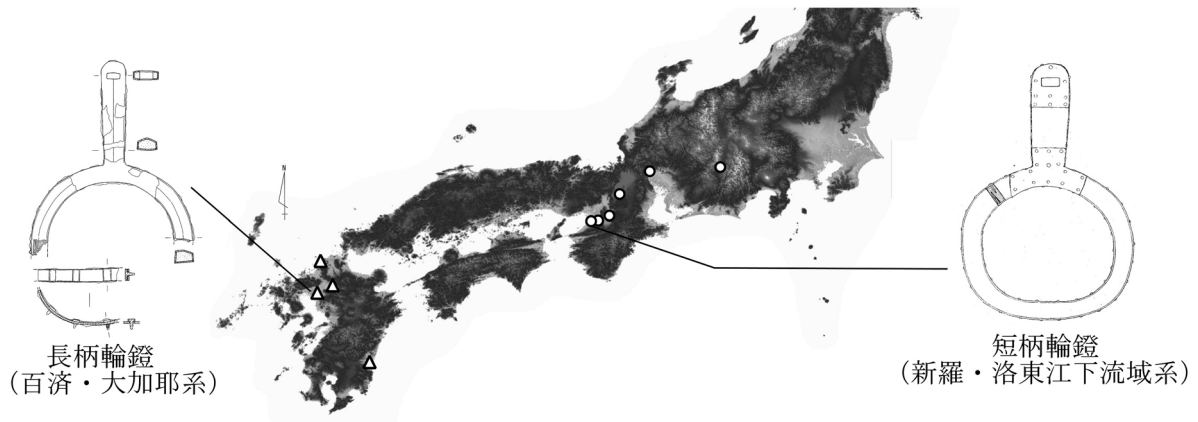


図4 導入初期の輪鏡にみる地域性

このような交渉様態に関して注目できるのは、近年、朝鮮半島西南海岸地域で確認が相次ぐ5世紀前半頃の「倭系古墳」の存在である。詳述は避けるが、その埋葬施設（竪穴式石室、石棺系竪穴式石室、箱式石棺）などは基本的に北部九州地域に系譜を求めることができる。また、その被葬者は、倭と百済・栄山江流域の交渉を実質的に担っていた倭系渡来人集団のリーダーのような性格で、いずれの古墳にも帯金式甲冑が副葬されていることから、倭王権とのつながりも有し、その外交にも従事していた可能性が高い〔高田 2016〕。

すなわち、「倭系古墳」は、北部九州地域と倭王権の協調的、もしくは競合的な関係の中で、朝鮮半島諸社会との交渉が重ねられていたことを示す、朝鮮半島側の考古資料と評価できよう。

### ③……………5 世紀後半の動向

5 世紀後半における中・北部九州地域の対朝鮮半島交渉については、玄界灘沿岸地域と有明海・八代海沿岸地域の間で、倭王権とのかかわりという点で対照的な側面があるので、それぞれの地域ごとに検討を行う。

#### 1. 玄界灘沿岸地域の対朝鮮半島交渉

##### a. 遠賀川上流域・宗像地域と新羅 一地域社会の主体的な交渉（図5）

玄界灘沿岸地域においては、5 世紀前半と同様に倭王権の交渉活動に関与する様態と、地域社会主体の交渉様態の2つに大別することが可能である。まず、玄界灘沿岸地域の主体的な動きを表象する資料として、遠賀川上流域に点在する古墳にみられる朝鮮半島系の埋葬施設や副葬品を挙げることができる。

**櫛山古墳の新羅系帯金具** 福岡県飯塚市櫛山古墳（図5-2）は、筑豊地域の平野部を流れて響灘へとそそぐ遠賀川の上流域に位置する。古墳からは、金銅製の三葉文透彫帯金具が出土している。三葉文透彫帯金具は洛東江以東地域に分布し、新羅の社会統合の表象たる服飾品の1つとして評価されている〔李熙濬 2019〕。櫛山古墳のものは、銚板に透かし彫りした三葉文や心葉形垂下飾のモチー

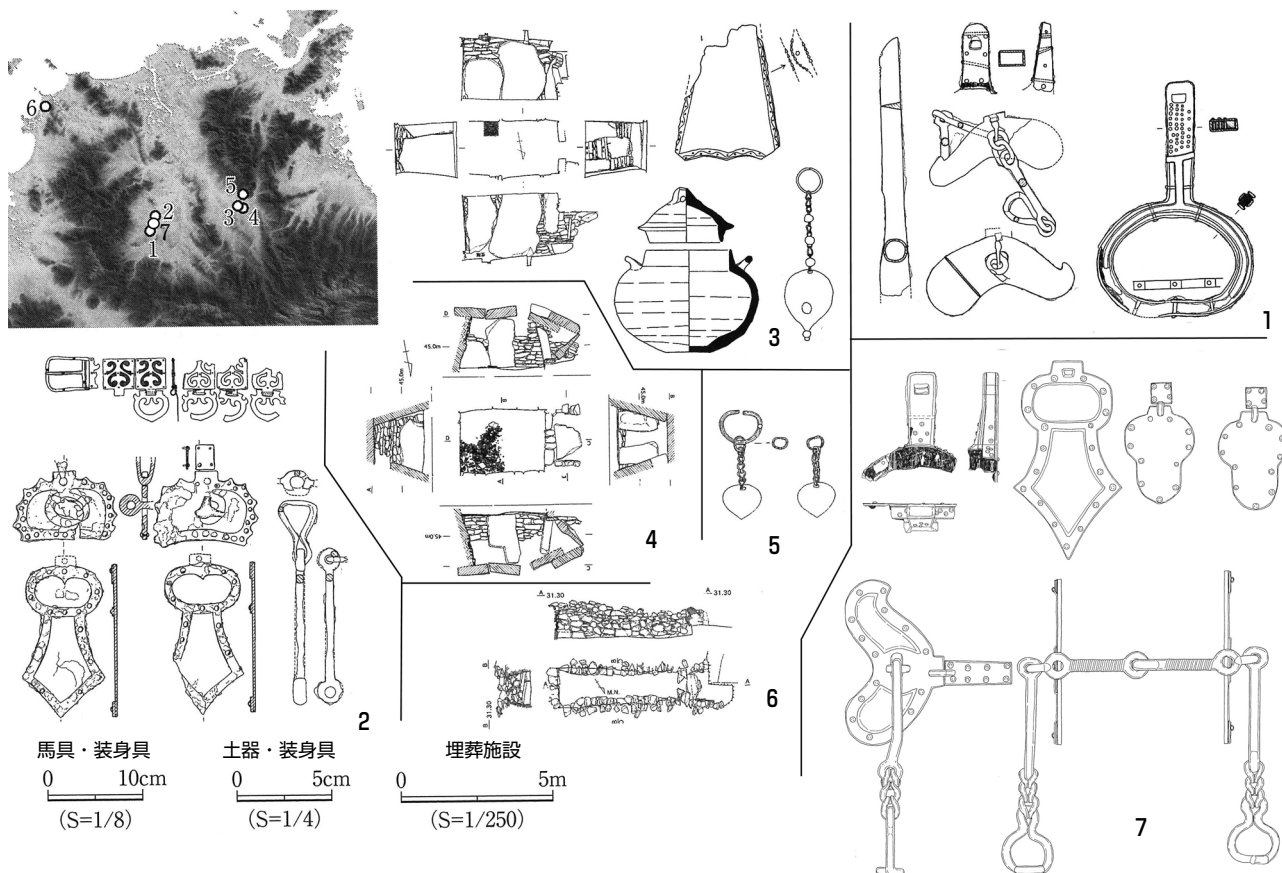


図5 遠賀川上流域の埋葬施設と副葬品

1：小正西古墳 2：壱山古墳（横穴墓）3：セソノ古墳  
4：猫迫1号墳 5：長畑1号墳 6：勝浦井ノ浦古墳 7：山の神古墳

フ、鉸具の形状、部品の法量など、新羅のものと共通性が高く、典型的な新羅系帯金具として評価できる。新羅から直接もたらされた可能性が高い。

壱山古墳の正確な位置、構造（横穴墓の可能性が高い）、年代、性格などを総合的に検討した嶋田光一は、壱山古墳の帯金具について次のように指摘している。

「畿内に存在せず、北部九州の遠賀川上流域で、単独に出土していることからすれば、この壱山古墳の帯金具（中略）は、畿内大和政権を経由することなく、朝鮮半島から直接にもたらされた可能性が強い」〔嶋田 1991 543 頁〕。

そして、その被葬者については、当時の緊迫した朝鮮半島情勢を背景として政治的に移住、亡命してきた人物と把握し、「新羅王朝内でも重くもちいられていた、人物だった可能性が高い」〔嶋田 1991 543 頁〕、「航海や造船の技術にも秀でた集団の長」〔551 頁〕と評価した。傾聴すべき見解である。

**遠賀川上流域の新羅系資料** 壱山古墳以外にも、遠賀川上流域では、様々な朝鮮半島系の副葬品や埋葬施設が確認できる。その系譜は多様であるが、特に洛東江以東地域に分布し、新羅系と評価できる資料が濃厚である。いくつか例を挙げると、壱山古墳のほど近くに築かれた小正西古墳（直径



28.5 m ほどの円墳)の1号石室(図5-1)では、現状では日本列島で唯一確の新羅系の輪鍔が出土している[穂波町教育委員会 2000]。また、嘉穂盆地の東方、田川盆地の猫迫1号墳(造営時期は5世紀前半にさかのぼる可能性が高い)やセスドノ古墳の堅穴系横口式石室(図5-3・4)については、新羅の有力な地域社会、大邱地域の達城古墳群(特に37号墳や55号墳)のものと構造が類似することが指摘されている[森下 1987 など]。さらに、セスドノ古墳では、新羅でも有力な古墳に限って副葬される金銅製の偏円魚尾形杏葉(周縁に波状列点文)も副葬されていた[齊藤 2020]。

**新羅系資料と百済・大加耶系資料の混在** このような新羅系資料は、百済・大加耶系資料と混在して確認されることが多い。例えば、小正西古墳1号石室出土の新羅系の輪鍔は、百済・大加耶系の刀身式鉄鉾や鉄製f字形鏡板付轡、木心鉄板張壺鍔とともに副葬されている。また、セスドノ古墳から出土した宝珠式垂飾付耳飾は、倭において製作された可能性が高いけれども、そのモチーフは大加耶系である。

新羅系の資料と百済・大加耶系の資料があわせて認められる状況は、玄界灘沿岸の宗像地域にも認められる。それを象徴するのが、福岡県宗像市勝浦井ノ浦古墳の前方部石室(図5-6)である[福津市教育委員会 2011]。細長方形の平面形をなす堅穴系横口式石室は、洛東江以東地域(昌寧、尚州、蔚山など)に系譜を求めることができる一方で、副葬品には、百済・大加耶系の装飾馬具(初期の剣菱形杏葉や木心鉄板張壺鍔)が確認できる。

**被葬者の性格と役割** ここまで取り上げてきた新羅系資料が認められる古墳(埋葬施設)は、それぞれ中大型円墳(猫迫1号、セスドノ、小正西)、横穴墓(櫛山)、そして前方後円墳の前方部石室(勝浦井ノ浦)であり、地域社会の中間的な首長層という評価ができそうである。そして、畿内地域とのつながりはさほど顕著ではないことや、系譜の異なる朝鮮半島系要素が認められることを重視すれば、玄界灘沿岸地域の主体的な対朝鮮半島交渉に直接的に従事し、その中で様々な朝鮮半島系文化を受容していた人物と考えられよう。その点において、「王権レベルの交流にかぎらない、新羅の有力者と北部九州勢力の接触」[齊藤 2020 345 頁]の動きを読みとることが可能である。

## b. 塚堂古墳 ―倭王権の外交に参与する様態

その一方で、倭王権に積極的に参与する形の交渉様態も、浮羽地域の若宮古墳群の中で、5世紀前半の月岡古墳に続いて造営された、塚堂古墳[吉井町教育委員会 1990]において確認することができる。塚堂古墳(墳丘長約90 mの前方後円墳)からは、百済や大加耶に系譜を求め得る多角形袋式鉄鉾、初期のf字形鏡板付轡や剣菱形杏葉、洛東江以東地域系の山形金具付胡籬、東萊蓮山洞M3号墳において類例が確認された龍文浮彫杏葉、他にも青銅製熨斗など、多様な系譜の朝鮮半島系副葬品が出土している。

注目すべきは、高橋克壽が指摘した埴輪の様相で、5世紀前半の月岡古墳や堤当正寺古墳と同様に、塚堂古墳にも畿内の埴輪が認められるという点である[高橋 2003]。塚堂古墳の被葬者についても、倭王権との王権の外交活動に参与する北部九州の有力首長層の姿を想定することは許され

よう。

ただし、月岡古墳と異なり、埋葬施設は北部九州に定着する初期横穴式石室である点から、これを共有する北部九州各地との密接な連携がうかがえる。

## 2. 有明海・八代海沿岸地域の対朝鮮半島交渉

**百済・大加耶系の装身具** 5世紀後半頃には、有明海・八代海沿岸地域においても多様な朝鮮半島系副葬品を有する古墳が築かれる。その代表例が、熊本県玉名郡和水町江田船山古墳（墳丘長約62mの前方後円墳）である〔菊水町史編纂委員会編 2007〕。初葬段階にともなう副葬品の中には、冠帽（百済系）、帯冠（百済・大加耶系）、長鎖の垂飾付耳飾（大加耶系、ただし倭風にアレンジされた可能性が高い）、龍文浮彫帯金具（大加耶系？）など、百済や大加耶系の装身具一式が含まれていた〔高田 2014a〕。また近隣の伝佐山古墳からも大加耶系の垂飾付耳飾が出土している。

実は、このような百済や大加耶系の装身具は、5世紀後半の日本列島各地から出土している。畿内地域以外の主要な事例は次の通りである。

- 瀬戸内     ：岡山県牛文茶臼山古墳（獣面浮彫帯金具）
- 紀伊       ：和歌山県大谷古墳（長鎖の垂飾付耳飾、龍文浮彫帯金具）
- 若狭       ：福井県西塚古墳（垂飾付耳飾、龍文浮彫帯金具）
- 東京湾東岸：千葉県祇園大塚山古墳（長鎖の垂飾付耳飾）
- 武蔵       ：埼玉県埼玉稲荷山古墳（龍文浮彫帯金具）
- 上毛野     ：群馬県築瀬二子塚古墳（長鎖の垂飾付耳飾）

各地の有力首長層の古墳である場合が多く、さらに、①豊富な朝鮮半島系の副葬品とともに、②帯金式甲冑や同型鏡群のような倭王権との政治的関係を表象する副葬品が副葬されることがしばしばである。

**「大加耶型の威信財」という評価** ①については、初期の装飾馬具、装身具、多角形袋式鉄鉾など副葬品の構成にある程度の定型性を看取できる。朴天秀はこれを「大加耶型の威信財」（図6）と評価し、それらを副葬する古墳の被葬者を、各地域社会で新しく台頭し、大加耶と結びついた新興勢力と解釈している〔朴天秀 1998〕。すべての系譜を大加耶に求められるわけではないが、百済や大加耶を主な相手とした交渉の中で、成長を遂げる各地の地域首長層ということは妥当であろう。

**「倭」という交渉主体** また②の倭王権との政治的関係を考えあわせると、大加耶や百済との交渉を重ねつつ、倭王権と直接的な政治的関係を結んだ地域首長層の姿を想定できよう。おそらく、その対朝鮮半島交渉の様態（のひとつ）としては、日本列島の諸地域社会が倭王権とともに交渉主体を形成し、朝鮮半島諸勢力と交渉を行うようなあり方を想定できそうである。

倭王権の側からみれば、対外交渉を円滑に進めるには、地域社会の航海技術や朝鮮半島とのコネクションを活用していくことが必要であろうし、地域社会の側からみれば、倭王権に積極的に参加して「倭」という交渉主体を形づくることは、単独で交渉するよりも安定して朝鮮半島系の文化を受容できるというメリットがあったろう。

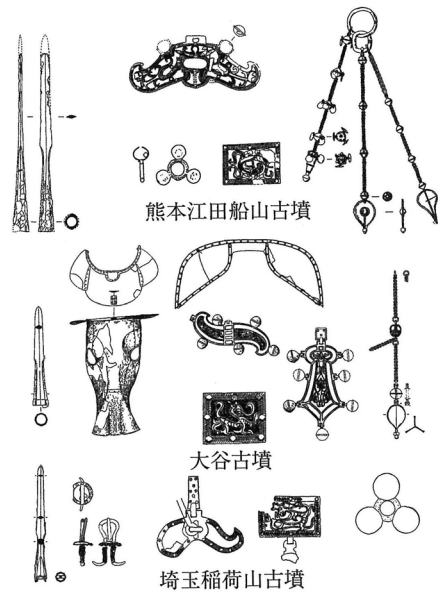


図6 朴天秀が提示した「大伽耶型威信財」

**先学の評価との整合性** このように考えることで、有明海・八代海沿岸地域の対朝鮮半島交渉の特色が浮き彫りになる。また、江田船山古墳の（初葬段階）の被葬者に対する先学の評価，例えば白石太一郎による「菊池川流域の有力豪族であって，（中略）朝鮮半島諸国あるいは南朝との交渉・交易に非常に重要な役割を果たした」〔白石 2002 52 頁〕人物という評価などとの整合性をはかることができる。

吉田晶も江田船山古墳の被葬者像について、「治天下」銘大刀の検討から次のように論じている。「その副葬品に中国・朝鮮系の優品が数多く含まれていることからすると，ムリテは有明海を通じて朝鮮地域と積極的に交流していたことがうかがわれる。おそらくそのことを通じて倭王権と緊密な関係を持つようになり，ワカタケルの宮廷で「典曹人」としての地位を得たものであろう。」〔吉田 1998 169 頁〕

### 3. 5 世紀後半における交渉様態

以上の検討を踏まえると，まず玄界灘沿岸地域の対朝鮮半島交渉には，基本的には5世紀前半と同様に，倭王権の外交に直接参与する様態とより主体性の強い様態の2つがあったと考えられる。後者の場合，相対的に新羅との交渉が相対的に緊密であった可能性が高い。そして，有明海・八代海沿岸地域は，倭王権と直接的な関係を結びつつ，他の諸地域社会と「野合」するような形での交渉を主に行っていたようである。その連携の一端を示すのが，西日本各地に分布する阿蘇石製刳抜式石棺やいわゆる「筑肥型」横穴式石室であろう〔高木 2002，柳沢 2014 など〕。

ここで注意すべきは，玄界灘沿岸地域では大伽耶系の装身具（特に垂飾付耳飾と帯金具）をセットで副葬する有力首長層の古墳が，いまだ確認されていない点であり，新羅系資料の分布は有明海・八代海沿岸地域では希薄である点である。このような状況にも対朝鮮半島交渉における両地域の対照性がうかがえる。それだけ，中・北部九州地域の交渉活動が多角的であったと評価できそうである。

今後の課題として付言したいのは、朝鮮半島中南部における中・北部九州系資料の抽出の必要性である。5世紀後半には、朝鮮半島中南部の倭系資料は相当な広がりを見せている。洛東江下流域の釜山・金海地域に加えて、洛東江以西の内陸部、慶尚南道西部地域、西南海岸、栄山江流域、中西部地域などである。しかしながら、倭系資料の大半が、須恵器や武器・武具類、倭製鏡などの副葬品であるため、その中から中・北部九州地域との交渉を示す資料を判別することが、現状では至極難しい。

ただし、埋葬施設については、5世紀後半代、おおむねTK 23・47型式期に中・北部九州地域と朝鮮半島諸社会との交渉の中で築かれたと判断できる事例がいくつかある。例えば、栄山江流域の羅州伏岩里丁村古墳の1号石室である。玄門立柱や腰石をそなえた北部九州系の横穴式石室であり、玄室から出土した須恵器は、TK 23・47型式期であり、5世紀後葉頃に築かれた可能性が高い〔国立羅州文化財研究所 2017〕。また、慶尚南道巨済島の長木古墳の北部九州系の横穴式石室についても、これまでは6世紀前葉頃の造営と考えられていたが、近年の研究では5世紀後葉～6世紀初頭頃までさかのぼる可能性が提起されてもいる〔河承哲 2011〕。

今後、朝鮮半島の倭系資料の分析から、5世紀後半代の中・北部九州地域の交渉様態や意図を検討していく観点が重要となろう。

## ④……………6 世紀前半の動向

6世紀前半においても、中・北部九州地域の朝鮮半島系資料は多彩であるが、その分布や系譜に変動が認められる。それは、朝鮮半島系の装身具である垂飾付耳飾によく反映されている。また、栄山江流域に築かれた前方後円墳をはじめとして、朝鮮半島中南部に九州系の横穴式石室墳が盛んに造営される時期でもある。

したがって、まず、中・北部九州地域の朝鮮半島系資料の分布や系譜を検討し、次に朝鮮半島中南部の九州系横穴式石室墳の概略をまとめる。その中で、対朝鮮半島交渉をめぐる中・北部九州地域と倭王権の関係の変化を探りたい。

### 1. 中・北部九州地域の朝鮮半島系資料

筑紫君磐井の寿陵と目される岩戸山古墳（墳丘長138mの前方後円墳）が位置する八女古墳群は、福岡県南部の広川町から八女市に所在する〔八女市教育委員会 1972〕。大きくみれば玄界灘沿岸地域と有明海・八代海沿岸地域のはざまにあたる。その地勢や古墳群の規模や内容から、「築後さらには有明海沿岸の石製表飾、九州北部の装飾古墳の展開の核となった地域であり、八女古墳群は筑紫君、筑紫国造の奥津城として、その権力基盤を物語る」〔重藤 2016 43頁〕と評価されている。その八女古墳群においても、いくつかの朝鮮半島系資料が確認されている。

**八女古墳群の朝鮮半島系資料(図7)** そのひとつは、岩戸山古墳の石馬における馬具の表現である。諫早直人は、石馬に三葉文心葉形杏葉、偏円魚尾形杏葉（馬鐸とみる見解もある）、後輪傾斜鞍などが表現されていることから、「新羅馬装そのままではないかもしれないが、それを強く意識して

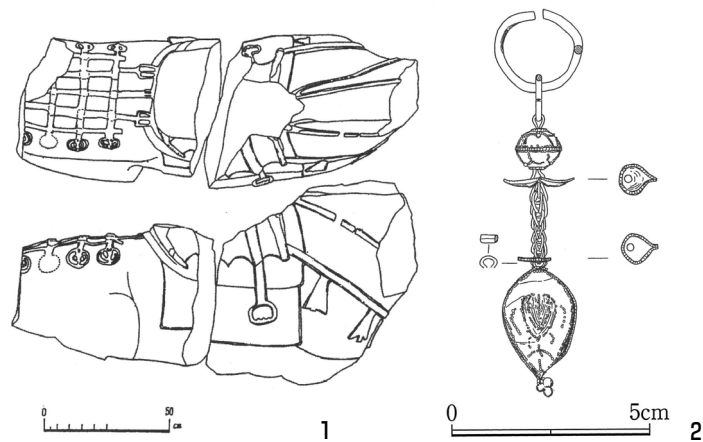


図7 八女古墳群の朝鮮半島系資料

1: 岩戸山古墳の石馬 2: 立山山8号墳の山梔子式垂飾付耳飾

いたことはたしかであろう」[諫早 2012b 98 頁]と述べている(図7-1)。その一方で、古墳群に属する中小円墳のひとつ、立山山8号墳では大加耶系の山梔子式垂飾付耳飾(図7-2)が出土している[八女市教育委員会 1983]。

このように、八女古墳群の朝鮮半島系資料をみるだけでも、中・北部九州地域の多角的な対朝鮮半島交渉のあり方が想定できる。

**玄界灘沿岸地域と有明海・八代海沿岸地域** その中で、朝鮮半島系の副葬品の系譜からみると、玄界灘沿岸地域と有明海・八代海沿岸地域において、対照性と共通性をうかがうことができそうである。

まず対照性については、新羅系の垂飾付耳飾が玄界灘沿岸地域(遠賀川上流域の福岡県長畑1号<sup>(6)</sup>墳、唐津平野地域の佐賀県埴内古墳)に認められる(図8)のに対して、百済系の垂飾付耳飾が有明海・八代海沿岸地域(追葬段階の熊本県江田船山古墳、同大坊古墳)が出土している(図9)。このような対照性は他の朝鮮半島系資料でも確認できる。玄界灘沿岸地域では、新羅圏でも有力首長墳にのみ副葬されるような馬具(伝福岡県長者の隈古墳出土の金銅装鞍)が確認できるのに対し、追葬段階の江田船山古墳では、金製の心葉式垂飾付耳飾や金銅製の飾履など、百済系の装身具が副葬されている。

資料数は限られるけれども、このような朝鮮半島系副葬品の様相に基づけば、5世紀後半と同様に、多角的な交渉をくりひろげながら、他地域に比して新羅と緊密であった玄界灘沿岸地域と、おそらく倭王権主体の外交へ積極的に参与する中で、大加耶や百済とのつながりを志向する有明海・八代海沿岸地域という姿を読み取ることができよう[高田 2014a]。

**大加耶系の垂飾付耳飾の分布** 両地域の共通性については、6世紀前半になると、有明海・八代海沿岸地域のみならず玄界灘沿岸地域でも、大加耶系の垂飾付耳飾が副葬される状況を挙げることができる。

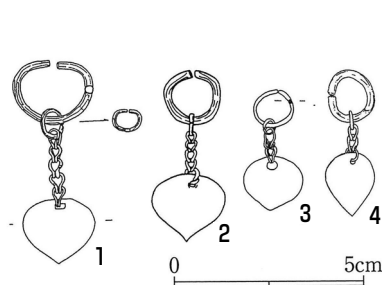


図8 長畑1号墳の新羅系耳飾と類例

- 1: 長畑1号墳 2: 義城塔里古墳Ⅱ 柳  
3: 尚州新興里ラ地区28号墳  
4: 江陵柄山洞B地区14号墳

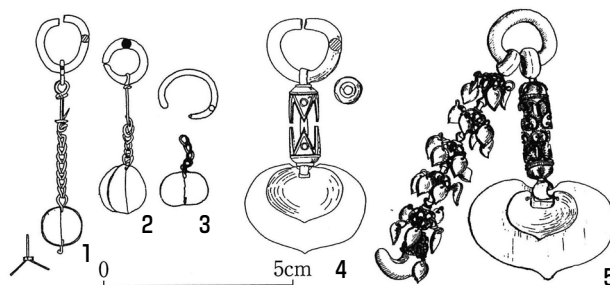


図9 有明海・八代海沿岸地域の百濟系耳飾と類例

- 1: 大坊古墳 2: 益山笠店里1号墳  
3: 益山笠店里98-1号墳 4: 江田船山古墳(追葬段階)  
5: 公州武寧王陵(王)

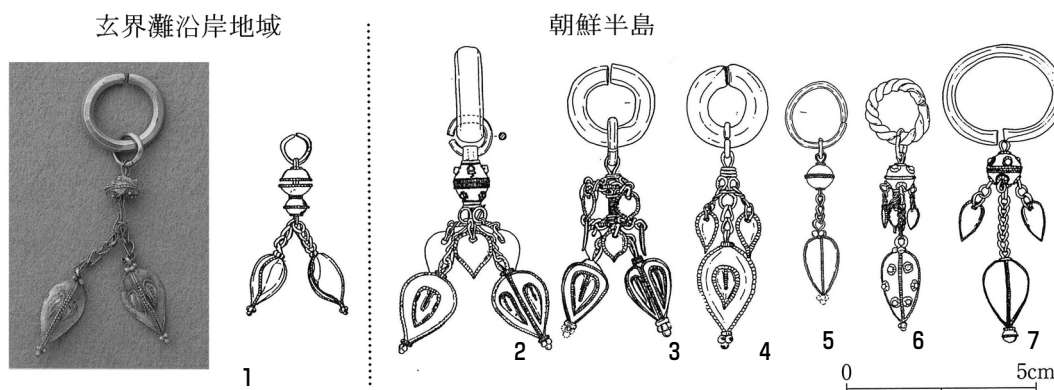


図10 山梔子式垂飾付耳飾の類例

- 1: 日拝塚古墳 2: 陝川玉田M4号墳 3: 陝川玉田M6号墳 4: 少年桂城A地区1号墳  
5: 高霊池山洞44号墳 柳 6: 伝晋州中安洞 7: 伝長水鳳棲里

3節でも論じたように、大加耶系の装身具（特に長鎖の垂飾付耳飾や龍文浮彫帯金具）は5世紀後半において日本列島の各地で出土するが、玄界灘沿岸地域では確認されていない。それが6世紀前半になると、突如として当地域に、大加耶系の垂飾付耳飾が分布するようになる。その多くは木の実形の垂下飾を有する山梔子式である（図10）。この型式は、中・北部九州地域と畿内地域（とその周辺）に限って分布している。この状況に、中・北部九州地域の対朝鮮半島交渉の様態に変動が生じた可能性を読みとりたい。この点で、重藤輝行の指摘が参考となる。

**対朝鮮半島交渉をめぐる倭王権との関係の変化（図11）** 重藤は、5世紀後半に比して6世紀前半では博多湾・唐津湾周辺で垂飾付耳飾が増加する傾向を指摘し、それが「磐井の乱後の対外交渉の変化と符合する可能性が高い」〔重藤 2016 45頁〕と論じている。首肯できる見解である。その傾向を生んだのが、主に大加耶系の垂飾付耳飾の増加であること、その分布が畿内地域とその周辺と中・北部九州地域に大別され、両者の間のつながりをうかがえることも考慮すれば、対朝鮮半島交渉をめぐる倭王権と中・北部九州地域の力学関係に変動があったと解釈することは許されよう。

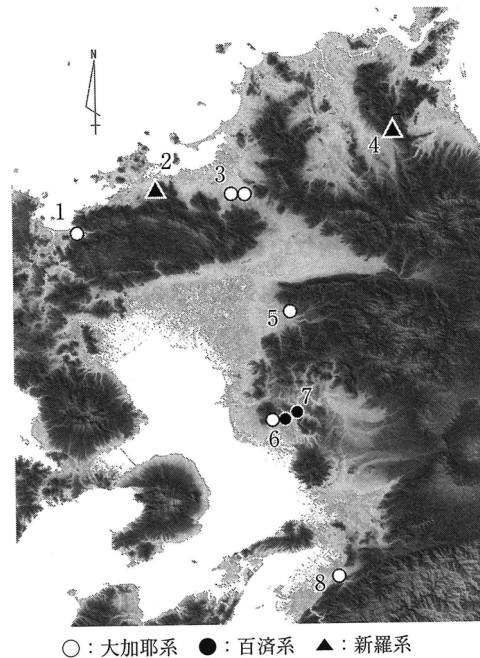


図 11 6 世紀前半における主な垂飾付耳飾の分布と系譜

○：大加耶系 ●：百済系 ▲：新羅系  
1：半田・宮の上古墳 2：陣内古墳 3：日拜塚古墳 4：長畑 1 号墳 5：立山山 8 号墳 6：大坊古墳  
7：江田船山古墳（追葬段階） 8：物見槽古墳 9：龍王崎 1 号墳

## 2. 朝鮮半島南部における中・北部九州系資料

5 世紀後葉から 6 世紀前半頃にかけて、朝鮮半島の榮山江流域、南海岸、洛東江以西地域などには、九州系の横穴式石室墳が築かれている〔柳沢 2014, 高田 2019 など〕。一口に九州系の横穴式石室といっても、その構造は様々ではあるが、大きくは、

- (1) 主に玄界灘沿岸地域から渡来した工人が主導して築造にあたったと想定できるもの。
- (2) 石室の各部分に中・北部九州系の要素を確認できるが、全体的に独特な形態になるもの。

の 2 つに大別することが可能である。

(2) から判断すれば、九州系の横穴式石室がある程度、それぞれの地域に定着していた状況がうかがえる。また、石室内部に納められた棺については、通有の木棺のほか、榮山江流域系の甕棺、百済系の装飾木棺、倭系の石棺や石屋形など多彩である。

榮山江流域では、前方後円墳に採用される場合が多い一方で、在地系の高塚古墳（例えば羅州伏岩里 3 号墳 1996 年調査石室、羅州伏岩里丁村古墳 1 号石室）の中心埋葬施設としても採用されている。榮山江流域社会が倭や百済との交渉を重ねる中で採用した埋葬施設として評価でき〔高田 2019〕、特に石室造営においては、石室工人の渡来・指導を含めた中・北部九州地域との交渉が重要であったと考えられる。ただし、倭系副葬品の中には、捩じり環頭大刀や三角穗式鉄鉾など倭王権とのつながりを示す器物が含まれていることを重視すれば（例えば前方後円墳たる咸平新徳 1 号墳）、その交渉に倭王権も深く関与していたことも確かである。

南海岸や洛東江以西地域においては、大加耶の交通路の要衝に分布したり、小加耶の盟主墳など

に採用される、という特徴を示す。また、新羅や百済などに系譜を追える外来の副葬品が多く認められる。その被葬者の姿は、小加耶中枢の有力首長（固城松鶴洞1号墳C号石室）、大加耶の対外交渉を実質的に担うような人物（宜寧景山里1号墳、宜寧雲谷里1号墳）、そして朝鮮半島諸社会との交渉を担う倭系集団の有力者（巨済長木古墳）などである〔高田 2014b〕。

以上のように、朝鮮半島南部の九州系の横穴式石室墳を総体として把握すれば、倭、大加耶、栄山江流域、そして百済などの多様な社会が関与する錯綜した交渉関係の産物として評価できる。その中で倭の側で主体的な役割を担ったのは、中・北部九州地域であったと見るのが自然である。<sup>(7)</sup>

しかし、その造営は、6世紀前半がピークとして、6世紀中葉以後はほとんど確認できない。この点においても、対朝鮮半島交渉をめぐる倭の政治的関係、具体的には倭王権と中・北部九州地域の関係に変動が生じた状況をうかがうことができそうである。

## ⑤……………中・北部九州地域の対朝鮮半島交渉と「磐井の乱」

以上、2～4節において、5～6世紀前半における中北部九州地域の対朝鮮半島の動向と様態を考古学的に検討してきた。本節では、その内容と、日本古代史によって示された「磐井の乱」の経緯や歴史的背景にどのような対応関係があるのかについて予察する。

### 1. 「磐井の乱」以前の状況

まず、「磐井の乱」勃発直前の情勢をもう少し鳥瞰的に整理する。

**緊迫する朝鮮半島情勢と倭王権** 5世紀後半の朝鮮半島の情勢は、高句麗南進を契機とした金官加耶の衰退と大加耶の台頭、新羅の「脱高句麗化」〔井上 2000〕、百済の漢城陥落と熊津遷都、栄山江流域に対する百済の統合志向など、緊迫の度合いを増していく。表面的には、南進政策を推し進める高句麗と、それに対峙する百済、新羅、加耶の協調という関係が維持されていたけれども、逆にみれば、その協調は高句麗への共同対処という一点に限られており、流動的で不安定な関係でもあった。それにともなって、倭王権の対朝鮮半島外交、具体的には倭王権と諸地域社会が「野合」〔新納 2005〕するような形での外交が、大きな支障をきたしはじめていた可能性が高い〔高田 2014a〕。

**倭王権の対応策** このような朝鮮半島情勢に対応するために、倭王権は諸地域社会が有していた朝鮮半島との独自のコネクションを一元化させる動きを本格化させる。筆者はそれが如実に表れたのが、いわゆる「吉備の反乱」として『日本書紀』に記録されている事件であろうと考えている。朝鮮半島との多様なつながりを有した吉備地域の中核に打撃を加え、海上、河川交通に長けた吉備周縁の各地域集団を徴発、編成させていった〔高田 2014a〕。

けれども、510年代に蟾津江流域（己汝・帶沙）に百済が進出したことにより、蟾津江を主要な対外交渉経路として活用していた大加耶と百済の対立が表面化する。さらに、520年代に、新羅が加耶への侵攻を本格化させたことで、それまで表面的ではあっても維持されてきた、新羅、百済、加耶の協調関係は瓦解する。その中で、倭王権はさらに対外交渉権の一元化を推し進めたと想定できる。



---

それを象徴するのが、「磐井の乱」ではないか。

## 2. 「磐井の乱」と考古学的状況の相関性

それでは、1990年代以後の古代史の研究成果〔田中俊 1992, 山尾 1999, 熊谷 2001, 吉田 2005, 田中史 2005, 森公 2006, 大高 2019 など〕を最大公約数的にまとめることで、「磐井の乱」の動向を提示しよう。

### 「磐井の乱」の動向

- (1) 524年に新羅が加耶への侵攻を本格化させ、「南加羅・喙己吞」に対して、第一次侵攻を行う。おそらく、その際に阿羅加耶（あるいは大加耶）などが倭王権への軍事的な支援を要請したと考えられる〔田中 1992 227頁〕。
- (2) 倭王権がそれを受けいれ、「近江臣毛野」を将軍とする対新羅戦への軍事的派遣を計画する。
- (3) この時、倭王権が磐井に対して、その勢力下にあった「香椎潟」（玄界灘沿岸地域）の港湾を倭王権直属の施設とし、北部九州地域に対し軍事的動員をかけるように求めた可能性が高い〔山尾 1999 206頁〕。
- (4) 磐井は、その求めに応じるか、それとも反発するか迷いを重ねるが、この時、新羅が磐井に対して密かに「貨賂」を送り、派兵阻止を要請する。
- (5) 磐井は新羅の要請を受諾し、倭王権の求めを拒否する。そして倭（倭王権）と朝鮮諸勢力をつなぐ海路を遮断し、「近江毛野臣」軍の渡海阻止のために挙兵する。
- (6) 翌年、「磐井の乱」は、中央から派遣された「物部麁鹿火」によって鎮圧される。
- (7) 磐井の子の「筑紫君葛子」は、父の罪によって殺されることを恐れ、「糟屋屯倉」を献上することで贖罪を願った。

このような「磐井の乱」の動向と、考古学的な状況を総合化する。

**考古学的状況との総合化** まず、(1), (2)のような倭と加耶、特に大加耶との密接な関係については、3節2.でも指摘したように、倭の大加耶系資料や加耶圏の倭系資料の分析から、すでに多くの指摘がある〔朴天秀 2007, 高田 2014a など〕。

次に(4)のように、新羅と磐井が「貨賂」のやり取りが可能なような政治的関係にあったことに注目できる。前節まで指摘してきたように、中・北部九州地域の中で、特に玄界灘沿岸地域が、他の地域社会に比して、新羅と緊密な関係にあったことは考古学的に傍証される。

そのこととも関連するが、(5)について、磐井が「外は海路を邀へて、高麗・百済・新羅・任那等の国の年に職貢る船を誘ひ致し、内は任那に遣せる毛野臣の軍を遮り」（『日本書紀』継体21年6月甲午条）と記されているのは、「地方豪族が有していた独自の外交権の存在をうかがわせる」〔森公 2006 135頁〕という見方がある。倭王権の意図とは異なる中・北部九州の主體的な交渉活動を反映する記述であり、この点も考古学的に確認できる。前節まで検討してきたように、中・北部九州地域（特に玄界灘沿岸地域）の対外交渉の様態には、倭王権の外交に積極的に参与するものとは別に、より主體的に朝鮮半島諸社会とつながる動きがあった可能性が高い。

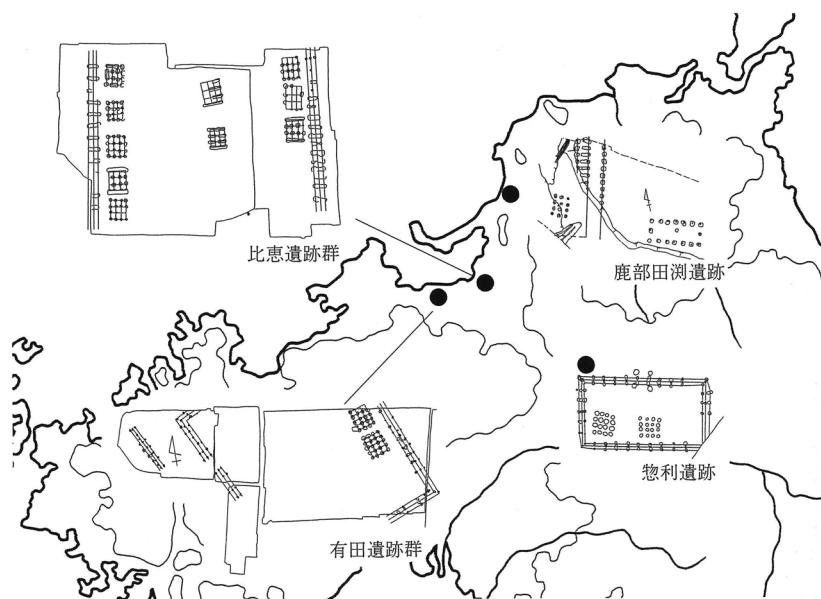


図12 特殊な建物群の分布 [藏富士 2011]

そして、(3)と(7)のように、乱勃発の契機と乱の帰結それぞれに、倭王権による玄界灘沿岸の港湾の直轄地化がある。その背後に外交権の一元化の志向を読みとることが可能であるし、主体的な対朝鮮半島交渉が成長の背景にあった磐井にとって、倭王権によって港湾施設が接収されることは、自らの権力基盤が大きく揺らぐことを意味したであろう。

玄界灘沿岸地域では6世紀前半以降、一列もしくは三列からなる柵状遺構に囲まれた総柱の倉庫群がいくつか確認されている(図12)。その中で、福岡県古賀市鹿部田測遺跡や福岡市比恵遺跡などが、それぞれ「槽屋屯倉」や「那津屯倉」との関連で評価されている。藏富士寛は、「その是非はともかく、これら建物群の出現は、これまでとは異なる地域社会のありようを感じさせるものであり、この変化に倭王権の関与を抜きにして考えることは難しい」と指摘する[藏富士 2011 122頁]。倭王権による玄界灘沿岸の港湾施設の直轄地化は、考古学的にも傍証しえると評価できよう。

**「磐井の乱」前後の交渉様態の変動** 4節において、6世紀前半に玄界灘沿岸地域にも大加耶系の垂飾付耳飾が分布するようになること、また、朝鮮半島南部地域における九州系横穴式石室墳の造営が、6世紀中葉頃までには、ほぼ停止することを指摘した。その背後に、倭王権と中・北部九州地域の対朝鮮半島交渉をめぐる力学関係の変化を読みとったが、おそらくこの事象もまた、「磐井の乱」を契機とした倭王権による外交権の一元化の動きを反映している。

このように、「磐井の乱」の動向と考古学による日朝関係史は、おおむね整合的な対応をみせている。中・北部九州の地域社会は、主体的な対朝鮮半島交渉をくりひろげていたけれども、それは「磐井の乱」を契機として大きく規制された。そして、倭王権との関係は、その外交政策に恒常的に従事するようなものへと、ひとまずは再編されていったのであろう。

## ⑥……………おわりに

以上、5～6世紀前半における中・北部九州地域の対朝鮮半島交渉の様態と「磐井の乱」の関連について検討してきた。「乱」勃発の要因を、主体的な対朝鮮半島交渉をくりひろげる中・北部九州地域と対外交渉権の一元化を志向する倭王権の確執、とみる先学の指摘〔例えば柳沢 2014〕を追認するにとどまった感もある。けれども、倭の対外交渉の動向と様態に大きな変化をもたらした「磐井の乱」の内実について、古代史と考古学の成果を総合化しながら、より豊かに描いていく糸口を少しでも提示できていれば、望外の喜びである。

### 註

(1)——1960年代までの「磐井の乱」に関する研究史については、山尾 1999 を参照。

(2)——主に戦後から現在にいたる古代国家形成論と日朝関係史の動向については、高田 2012 を参照。

(3)——本稿では「主体的」な交渉という表現を用いるが、これは倭王権と全く関わりをもたない地域社会独自の交渉だけを意味するわけではない。諸地域社会の側からみれば、倭王権の外交活動に積極的に参与するなかで、そこで自らの交渉目的を達成しようという動きも、「主体的」な交渉活動として評価すべきと考えている。検討すべきは、倭王権の関与がどの程度であったのかという点にある。

(4)——本稿は、2016年度日本史研究会5月例会において口頭発表した内容に基づいたものである。

(5)——この地域区分は基本的に、藏富士 2011 に従っている。

(6)——遠賀川上流域に位置する福岡県香春町長畑1号墳から出土した垂飾付耳飾については、調査報告者の川述昭人・伊崎俊秋氏の以下のような傾聴すべき指摘がある。

「香春町も『豊前国風土記（逸文）等』により新羅系渡来人との関係が指摘されていて、この長畑1号墳の垂

飾付耳飾りも新羅系渡来人が携えてきたものか、あるいは当地で製作したものかは判断できないにしても、朝鮮半島に由来する文物であることは疑いないところである。」〔川述・伊崎ほか 1998 23, 24 頁〕。

実際に、長畑1号墳から出土した垂飾付耳飾は洛東江以東地域を中心に分布する型式であり〔高田 2014a〕、文献記録と考古資料が一致をみせる貴重な事例と評価できる。ただし、その時期については5世紀後半にさかのぼる可能性も否定はできない。

(7)——近年では、公州や扶余地域で横穴墓の確認が相次いでいる。その造営時期はおおむね6世紀前半頃であり、北部九州系横穴式石室墳の時期と類似する。24基もの横穴墓が確認された公州丹芝里遺跡のような場合と、横穴式石室墳で構成される古墳群に混在して数基が築かれるような場合がある。横穴墓は百濟圏では外来系の埋葬施設であり、倭との関わりが考えられる。韓国考古学界では、その被葬者を『日本書紀』雄略23年条の「筑紫國軍士五百人」と関連づける見解が提示されている〔金洛中 2013〕。ただ、横穴墓の系譜について果たして中・北部九州地域に限定できるのかも含めて、もう少し検討が必要である。

### 引用・参考文献

(発掘調査報告書については主要なものに限り提示した。詳細は高田 2014a をご参照いただきたい。また韓国語文献については末尾に(韓)を付した。)

甘木市教育委員会 1999 『堤連町遺跡』

甘木市教育委員会 2000 『堤当正寺古墳』

諫早直人 2012a 『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣

諫早直人 2012b 「九州出土の馬具と朝鮮半島」『沖ノ島祭祀と九州勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会 北九州大会実行委員会

- 
- 井上直樹 2000 「高句麗の対北魏外交と朝鮮半島情勢」『朝鮮史研究会論文集』38 朝鮮史研究会
- 大高広和 2019 「磐井の乱」『古代史講義【戦乱篇】』ちくま新書
- 川述昭人・伊崎俊秋ほか 1998 「長畑遺跡」『長畑遺跡 宮原遺跡 小倉古墳 才立横穴墓』香春町教育委員会
- 菊水町史編纂委員会編 2007 『菊水町史 江田船山古墳編』
- 金 洛 中 2013 「5～6世紀南海岸地域における倭系古墳の特性と意義」『湖南考古学報』45（韓）
- 国立羅州文化財研究所 2017 『羅州伏岩里丁村古墳発掘調査報告書』（韓）
- 藏富士寛 2011 「九州北部」『講座日本の考古学7 古墳時代（上）』青木書店
- 熊谷公男 2001 『日本の歴史03 大王から天皇へ』講談社
- 齊藤大輔 2020 「新羅系文物からみた磐井の乱前夜 ―セスドノ古墳出土偏円魚尾形杏葉を中心に―」『福岡大学考古学論集3』武末純一先生退職記念事業会
- 重藤輝行 2016 「筑紫君磐井の乱と八女の古墳文化」『特別展「八女の宝室」九州歴史資料館
- 嶋田光一 1991 「福岡県榑山古墳の再検討」『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念論集
- 白石太一郎 2002 「船山古墳の墓主は誰か」『東アジアと江田船山古墳』玉名歴史研究会 雄山閣
- 杉井 健 2010 「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会
- 高木恭二 2002 「熊本の前古墳からみた船山古墳」『東アジアと江田船山古墳』玉名歴史研究会 雄山閣
- 高田貫太 2012 「古墳時代の日朝関係史と国家形成論をめぐる考古学史的整理」『国立歴史民俗博物館研究報告』170 国立歴史民俗博物館
- 高田貫太 2013 「古墳出土龍文透彫製品の分類と編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』173 国立歴史民俗博物館
- 高田貫太 2014a 『古墳時代の日朝関係 ―新羅・百済・大加耶と倭の交渉史―』吉川弘文館
- 高田貫太 2014b 「5・6世紀における百済、栄山江流域と倭の交渉 ―倭系古墳・前方後円墳の造営背景を中心に―」『全南西南海岸地域の海上交流と古代文化』図書出版慧眼
- 高田貫太 2016 「5・6世紀朝鮮半島西南部における『倭系古墳』の造営背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』211 国立歴史民俗博物館
- 高田貫太 2019 『「異形」の古墳 朝鮮半島の前方後円墳』角川選書
- 高橋克壽 2003 「5世紀の日韓交渉と九州」『古代日韓交流の考古学的研究―葬制の比較研究―』科学研究費補助金研究成果報告書
- 田中史生 2005 『倭国と渡来人 交錯する「内」と「外」』吉川弘文館
- 田中俊明 1992 『大伽耶連盟の興亡と「任那」』吉川弘文館
- 土屋隆史 2018 『古墳時代の日朝交流と金工品』雄山閣
- 新納 泉 2005 「経済モデルからみた前方後円墳の分布」『考古学研究』52-1 考古学研究会
- 野上丈助 1983 「日本出土の垂飾付耳飾について」『古文化論叢』藤沢一夫先生古希記念
- 河 承 哲 2011 「外来系文物を通じてみた固城小加耶の対外交流」『加耶の浦口と海上交通』第17回加耶史学会会議 金海市学術委員会・仁済大学校加耶文化研究所（韓）
- 朴 天 秀 1998 「考古学からみた古代の韓・日交渉」『青丘学術論集』12 韓国文化振興財団
- 橋本達也 2010 「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の交流』高知大学人文社会科学系
- 福津市教育委員会 2011 『津屋崎古墳群Ⅱ 勝浦峯ノ畑古墳』
- 穂波町教育委員会 2000 『小正西古墳』
- 森 公章 2006 『戦争の日本史1 東アジアの動乱と倭国』吉川弘文館
- 森 浩一 1974 「考古学と馬」『日本古代文化の探求 馬』社会思想社
- 森下浩行 1987 「九州型横穴式石室考 ―畿内型出現前・横穴式石室の様相―」『古代学研究』115 古代学研究会
- 柳沢一男 2014 『筑紫君磐井と「磐井の乱」』新泉社
- 山尾幸久 1989 『古代の日朝関係』塙書房
- 山尾幸久 1999 『筑紫君磐井の戦争 ―東アジアのなかの古代国家―』新日本出版社
- 八女市教育委員会 1972 『岩戸山古墳 ―環境整備事業に伴う基礎的調査の報告―』
- 八女市教育委員会 1983 『立山山古墳群』
- 吉井町教育委員会 1990 『若宮古墳群Ⅱ ―塚堂古墳・日岡古墳―』
- 吉井町教育委員会 2005 「月岡古墳の構築時期、性格と後継」『若宮古墳群Ⅲ ―月岡古墳―』
-

- 
- 吉田 晶 1998 『倭王権の時代』新日本新書  
吉田 晶 2005 『古代日本の国家形成』新日本出版社  
吉武孝礼 1999 「まとめ」『堤蓮町遺跡』甘木市教育委員会

#### 図出典

(いずれも一部改変の上で転載)

図1～4・6・8～11：高田貫太 2014a

図5：朴天秀 2007

図7：森浩一 1974・野上丈助 1983

図12：藏富士寛 2011

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2020年12月11日受付, 2021年3月16日審査終了)

## **“Iwai Rebellion” as Seen from the History of Japan-Korea Relationships by Archeology: Form of Negotiations with the Korean Peninsula in the Central and Northern Kyushu Region**

TAKATA Kanta

The “Iwai Rebellion” is a conflict between Yamato (King Keitai) and Northern Kyushu (Tsukushi-no-Kimi-Iwai) that broke out in AD 527 (some say it was AD 531). Many years of research have revealed that the situation in East Asia at that time, especially the trends in Japan-Korea relationships, is deeply related to the outbreak of “rebellion”. Therefore, archaeological investigation on negotiations with the Korean Peninsula in the central and northern Kyushu regions in the 5-6th centuries and integration with research results of ancient history will richly clarify the historical significance of the “Iwai Rebellion”.

As a result of archaeological studies, mainly in the 5th century, two major modes could be envisioned for negotiations with the Korean Peninsula in the central and northern Kyushu regions. In other words, it is a mode in which it actively participated in diplomacy led by the Wa kingship and acts with its intention, and a mode in which a person who is good at foreign activities was placed under the umbrella to handle continued negotiations with the Korean Peninsula.

Also, in the latter half of the 5th century, a subtle difference was observed in the relationship between the Genkai Sea coastal area and the Ariake Sea coastal area to the Wa kingship. The latter seems to have been negotiating in an unprincipled manner with the other regional communities while having a more direct relationship with the Wa kingship as well as a relatively deep connection with Baekje and Gaya. On the other hand, it became clear that the former had a high weight of independent negotiations and a closer connection with Silla.

Then, in the former half of the 6th century, changes were observed in the form of negotiations, such as the sudden spread of earrings with hanging decorations from the Daegaya to the coast of the Genkainada sea area. It is interpreted that the chiefs of the central and northern Kyushu regions became to negotiate with the Korean Peninsula mainly in line with the intention of the Wa kingship.

By combining the above archaeological studies with the trends and background of the “Iwai Rebellion” which was revealed in ancient history, a considerable degree of consistency can be found. Therefore, it can be assumed that one of the factors behind the outbreak of the “rebellion” was the feud between the central and northern Kyushu regions, which are engaged in proactive negotiations with the Korean Peninsula, and the Wa kingship, which aims to unify the right to foreign negotiations.

Key words: “Iwai rebellion”, Central and northern Kyushu regions, Kofun period, Burial facility and grave goods, Japan-Korea relationship,

---